

■■ 猪の話 I ■■ = = = ⇒猪の話

秋になって田圃の稲が色づく頃になりますと、それまで山の奥ばかりにいた猪が、里近く出てきます。そうして稲を食い荒します。だから山の村の人たちは、猪をにくんで、どうしたら猪を防ぐことができようかと、いろいろ苦心します。猪は日本の山にはどこにもいて、昔ほどではありませんが、田や畑の作物を荒らすのです。それで猪をおどかすためにかかしも立てますが、田圃や畠のまわりに、丈夫な垣や壕を設けておきます。その垣を古い言葉でイヌガキといますが、別にシシガキ、マセ、ワチともいいます。これは戦場の鹿砦や塹壕さかもぎに当たるわけです。その一方に、小さな番小屋を作って、そこに寝泊りして、夜っぴて板やかねをたたきながら、ホイホイと呼んでいます。この番小屋を猪小屋とも猪番小屋ともいいますが、これも戦場のトーチカを思い出します。だからその人たちには、猪は敵兵と同じです。

山の秋はもう寒いので、小屋の中にはいろりを設けて、焚火をしながら夜を明かします。大切な稲をまもるためには、こうしなければなりません。都会の人などはおかしく思いましようが、この番小屋泊りも食糧増産の戦士なのです。

こんなに悪いにくい猪ですが、昔から日本人は猪はそう嫌いではなかったらしいのです。だから絵や物語の題材にもよく選ばれています。そうして人の名に、猪の早太だの猪の助、猪一郎などと、猪の字を使います。また一〇月にはいると、猪（亥）の子節句といって、新しくみのった穀物で、餅や団子その他種々の食物を作って、神様のお祭りをします。

亥の子というのは、猪の子供という意味ではなくて、鹿を鹿の子、亀を亀の子というように一つの愛称なのです。だから亥の子節句は、猪の節句という意味になります。なぜ一〇月を猪の節句と叫ぶか、その意味はわかりません。

猪は以前はいといいました。これは鹿をかというのと同じで、のちに猪をいのしし、鹿をかのししというようになりました。ところがさらにそのいをはぶいて、ししともいいました。ししというのは、ほんとうは獣とか肉ということであるらしいのです。それでししというのは、猪のことでもまた鹿のことでもあります。

日本の山にいる動物では、猪は熊を除いて一番大きくて、そして強い獣です。だから猛猪などという言葉もあって、恐ろしい、猛々しいものにもたとえられました。そんなわけでこれを退治した武勇談が、私たちの歴史にはたくさんに語り伝えられています。なかでも鎌倉時代に源頼朝が富士山の山麓で狩を催したとき、大猪が出

て荒れ廻るのを、伊豆の仁田四郎という勇士が、その猪に飛び乗って、退治した働きは特に有名です。勇猛な獣だからこれを退治したことが手柄にもなるのです。ことに手負い猪とって、傷ついた猪は、恐ろしいものであったのです。猪之助とか猪一郎などという名前も、もしかしたら、勇猛であることを好んで、つけた名前かも知れません。

豚はかっこうが猪に似ているので、これと区別するために、猪を特に野豚とも書きます。豚は野にいる猪を捕らえてきて、飼いならしたものでしょうが、今日本などにいるものは、大分ちがっています。第一猪は鋭い半月形の牙を持っていて、これに掛けられると命が危ないことがあります。豚にはそういうものはもうありません。